

喜怒哀楽

6-7
Vol.98

ここに響くことば

新潟県糸魚川市出身の批評家・随筆家若松英輔氏の著書からここに響いた言葉を抜粋してご紹介します。

◇言葉はときに、光となって私たちの人生に現れる。人は、言葉によって照らされた道を歩いている。危機にあるとき私たちは本能的に言葉を探す。

◇たった一つの言葉が、人間を暗闇から救い出してくれることがある。そればかりか、生きる意味とは人生の言葉と呼ぶべきものとめぐり逢うことのようにすら思う。

——『言葉の羅針盤』「光の場所」より

●若松英輔

1968年生まれ、慶應義塾大学文学部仏文科卒業。
2007年「越知保夫とその時代 求道の文学」にて第14回三田文学新人賞評論部門当選。
2016年「叡知の詩学 小林秀雄と井筒俊彦」にて第2回西脇順三郎学術賞を受賞。



「喜怒哀楽」は、文芸を楽しむ方々の活力の源を目指し(株)ミューズ・コーポレーション喜怒哀楽書房が隔月発行している情報誌です。

温古知新 ⑤

「菜根譚」23

今回の「菜根譚」は87項から。じめつとした梅雨の季節に向かいますが、そんなときのお役にたてますよう。

念頭起こる処、纔かに欲路上に向かつて去るを覚らば、便ち挽きて理路上より来たせ。一たび起こらば便ち覚り、一たび覚らば便ち転ず。此は是、禍を転じて福と為し、死を起こして生を回すの関頭なり。切に輕易に放過すること莫れ。
(心が動いた時、欲望に向かっていると感じたら直ぐに道理の方向に修正し、少しでも心が動いたと感じたらそれを感じて正しい方向へ向かえ。それこそが、災いを幸いに転じ、起死回生の大チャンスである。軽々しく見逃してはならない。)
災い転じて福となす。少しの変化も見逃さず、気づいたときに修正を!

静中の念慮澄徹なれば、心の真体を見る。閑中の気象従容なれば、心の真機を識る。淡中の意趣冲夷なれば、心の真味を得る。心を観じ道を証するは、此の三者に如くは無し。

(静かな中で、思いや考えが澄みきつてい

れば、心の本当の在り方が見える。閑な時に、気持ちがあゆんだり落ち着いていけば、心の本当の動きが見える。穏やかな時に、わだかまり無く淡々としていければ、心の本当の味わいが得られる。本心を知り正道を理解するには、この三つに勝るものはない。)

静中の静は真の静に非ず。動処に静を得来たりて、纔に是れ性天の真境なり。楽処の楽は真の楽に非ず。苦中に楽を得来たりて、纔に心体の真機を見る。

(静寂の中で感じる静かな心は本物の静かな心ではない。雑踏の中でも静寂な心を得られれば、それが本来の心の在り方である。楽な環境で感じられる喜びは本物の喜びではない。苦境の中でも喜びを得られるようになれば、それが本当の心の働きのなである。)

いつ何時でも、穏やかで落ち着きを持ち、どんな環境でも本来のあり方が見える。思わぬところに真理はあるのかもしれない。

梅雨のじめじめした季節へ向かっています。慌てず急がず、物事をじっくり見つめてみるのもいいかもしれません。(古川久美子)

朝日カルチャーセンター 京都教室「俳句を楽しむ」

講師 田島和生様

(京都府・京都市)



▲常に笑顔で傘寿とは思えない若々しい田島さん

5月10日、新潟から3月に就航した「psca」に乗って上洛して参りました。うかがった先は、昨年12月に合同句集出版のお手伝いをさせて頂いた「朝日カルチャーセンター京都教室」。「写生と即物具象」を根本に指導にあたられるのは俳誌「雉」主宰で「晨」同人の田島和生さん。21年にわたりこの教室を指導している田島さんの傘寿のお祝いにと、会員が自発的に役割を担い、何度も打ち合わせを重ね、完成したという合同句集『俳句楽々』。「俳句を楽しむ」という名の講座は、どんな句会となるのやら。

がお好みか意見を伺うが「2票差なら、僕が柿の花言うても椎の花の勝ちやね」と、実に民主的な会。
次に、一冊の句集から講師が10句を抜き出して講評、その中で各人が好きな句を2句選び、それぞれの好みを比べます。今日の一冊は前田攝子句集『雨奇』。

続いて、前回決めた兼題「春昼」とその他雑詠2句(計3句)の中から各自好きな句を2つ選んで褒めます。これに対する講師のコメントと添削がこの句会の醍醐味。

春昼やゆくりゆつたり宛名書き 市男

春の昼、ゆつたりした気持ちで友だちに手紙を書いていく。「ゆくりゆつたり」の表現がいい／気だるい春の昼にゆつくり宛名を書くのはぴったり。田島：ゆくりとゆつたりは同じ言葉だから、ゆつたりを外して誰に対する手紙かを入れてもいい。

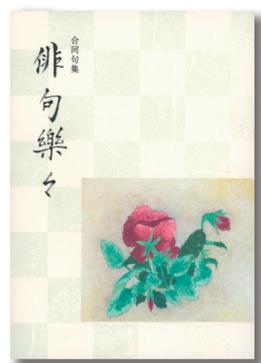
春昼や友へゆつくり宛名書く 千香子

最初、日本の景色?と思った。風力発電の風車かも。田島：その通りを写生した句。「対岸」を入れたことで川に映っている感じも出た。ただ風車なら高々は当たり前。動くとか回るとか、入れてみては。

対岸に風車の回り春の昼 ゆき

母親が猫をなでながらゆつたり座って独り言をつぶやいている。いかにものんびりとした春の昼の光景。

田島：ええ雰囲気やね、幸せそうで。猫抱いて母の独語や春の昼



▲一人27句と小文からなる合同句集『俳句楽々』

家持の桃に執しし春の昼 類子

意味がわからなかった／桃は秋の季語、桃の花は春の季語やけど...。田島：「ゴッホのひまわり」と一緒で、この場合「家持の桃」は季語にならない。大伴家持に「春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ」という歌がある。春の昼に、いつまでもその歌が頭に残っている、というかなり高尚な句。

採ろうと思ったが「執しし」がひっかかった。元歌のテーマは決して桃が主題ではなく乙女だから。
家持の桃の花読み春の昼

ここで突如、市男さんが教室の窓越しに見える景色を見ながら「類子先生、この空の色を群青色いうんですかね、いい色や」と、東山の背景に広がる暮れなずむ空の色を、絵の先生である類子さんに問う。確かに暮色がきれい。そして、この会、実に自由だ。
春昼の町駆け抜ける救急車 育子

良：ゆつたりとした春の昼に、あれっという意外性。この句を選んでいくときにちょうど救急車を通り、サイレンの音がだんだん小さくなって：駆け抜けるってこのことか、と。
田島：良さん、最近句評が急にうまく

なったね、どうしたん。気持ち悪いわ(笑)。
春昼の町へサイレン駆け抜ける 修道
春昼の牧場に牛の群れ臥せり 修道
絵になっている、でも決まりすぎや(笑)。

田島：決して悪い句ではないが、群れ臥せりが今ひとつ。臥すはふつう病気の場面に使う。坐るとか、田舎っぽい表現だがねまる、もある。
群れ牛の牧場に坐り春の昼 博
春の屋黒髪ゆれて句ひけり 博

田島：少女とかこういう句は、葵生さんが好きなんだわ、そしたら案の定採ってる(笑)。修道さんも青春性のある句好きやな、元気さの象徴だ。作者：満員の地下鉄に女子高生が乗ってきて、髪振り乱して喋るとるんですな。汗とシャンプーの混じったなんともいえない匂い。青春時代を思い出してそれで黒髪ゆれて、と入れたんですんません(笑)。

春の屋黒髪濡れて句ひけり
猫カフエの窓に三毛の手春の昼 陽一
猫嫌いなんですけどね、何となく／猫カフエってどんなん？／猫を触らせてくれて、猫好きは癒される。今はフクロウカフエもある。

田島：おもしろい句や、よう詠まれたな。ただ、三毛まで言わなくていい。
猫カフエの窓へ猫の手春の昼

●雑詠1
暁の谷に鶯の声高し 修道
田島：声高しまでいわなくていい。俳句は鶯や、でそこに鶯が鳴いているよ、ということになる。



「谷」はたに、と読んだ方がいい？
五七五の定型という考え方でいうと
「や」になるのかと／鶯の鳴き方に「鶯
の谷渡り」という言葉がある／そうす
ると「声高し」はいらんいうこと？／
先生、この句は「あかつき」より「あ
かとき」と読んだ方がいいのでは？
田島：確かに「あかとき」でもいい。
「へ」の方が動きが見える。
暁の谷へ鶯響きけり
婦り道青草結びて作る畧 葵生
蚊帳吊草の一種や思いますが、懐か
しい／ほんと、懐かしさに共鳴する。
田島：草を縛って、来た人をひっくり
返すやつやな。「婦り道」が邪魔、説
明っぽい。道だけでいい。
畧作る道の青草確と結び
入れ替り壁の巢急ぐ若燕 信男
若燕なんて季語あるんかな／若い燕
という言葉がなあ、気になるなあ(笑)
／入れ替わって夫婦になった燕が巢を
つくっているということ。
入れ替はり壁の巢づくりつばくらめ
道問へば牛もかほ出す豆の花 育子
ユーモアがあつていい。
田島：おもしろいが、類句がありそ
う。豆の花がいい。

道問へば牛の顔出す豆の花
凱旋門ぐりし目の隈にリラの花 類子
田島：目の隈ってなに？
目の端についていう意味でしょう。
田島：そういう意味か。パリの旅行で
疲れてできた目の隈かと。
そんな野暮つたいこというてまへん、
リラの花やのに(笑)。ローマ軍が凱旋
してきた、その時に馬上からチラツと
見たらリラの花を挿した彼女がいた、
そういう意味でしょ(笑)／凱旋門が
背景の枠に見えるってこと。
田島：目の隈が気になった。
凱旋門ぐりて仰ぎリラの花
一心の混声響む聖五月 節子
田島：これまた力の入った句やな。一
心が強すぎる。混声合唱が響いている
だけいい。
混声のホールに響み聖五月
青梅の策に盛られて香りたる 良
田島：香りたる、だけでは平凡やから
もう少し色気をつければ
もう少し色気をつければ
青梅の策に盛られてよく匂ふ
桜餅惚けし友の苞にせり ゆき
田島：惚けてきた友だちの土産に桜餅
を買ったということ？ もう少しやわ
らかい表現に。
作者：私のことを思い出してほしいと
いう願望もありつつ。
桜餅惚けし友へ揚げゆけり
茄子苗もしし唐苗も花ひとつ 市男
それぞれの苗に花が一つずつついて
いるということ、音の調子がいい。
田島：「も」だと句が中だるみになる
から「や」で切ってもいい。
茄子苗や獅子唐苗や花ひとつ

●雑詠2
夏隣川に鶯除けのロープ張り 信男
田島：養殖場みたいなところ？ ロー
プを張って鶯よけをしているというお
もしろい風景。
作者：これ鴨川の四条を下がったどん
ぐり橋の辺り。鮎の溜まり場にロープ
を張って鶯に取られないようにしてま
すよ。
雨の朝霧島つつじ満開へ 陽一
田島：信男さんと良さんが今度も一緒
にこの句を選んだね。二人はどこか黒
い糸か何かでつながってるのか気が合
うね。
信男：ぼろぼろの糸や(笑)。霧島つつ
じはきれいな、特に雨の長岡天満宮。10
年くらい長岡京に住んでいたが、毎年
見に行っていた。
田島：雨の朝より雨上がりの方がきれ
い。
満開の霧島つつじ雨上り
さざ波の煌めくダム湖夏近し 育子
田島：この句めちゃうくちや沢山選ばれ
たね。これだけ選ばれたら文句言えな
いな、もう何も言いません(笑)。
さざ波のダム湖きらめき夏近し
遮断機の棹先揺る薄暑かな 良
田島：よく詠まれている、薄暑という
季語が効いている。
遮断機の棹先の揺る薄暑かな
都路に散り積もりたる銀杏花 市男
田島：銀杏花より銀杏の花の方がいい。
都路や銀杏の花の散り積もる
作者：お恥ずかしい話、70歳を過ぎて
初めて銀杏の花を知った。いつ咲いて
いつ実がなるんか不思議やったんです
が、今年ほんまに都路に積もるほどの



▲お一人おひとりの色がはっきりとしたメンバーの皆さま

銀杏の花を見た。栗の花の短いのが京
大の正門の東大路のところ一面にばーつ
と。それで何とかこれを俳句に残して
おきたかった。先生の直された添削の
句を、ぜひ私の句にさせていたくださ
いと思います(笑)。
★「俳句を楽しむ」という講座名にた
がわず、初心者からベテランまで、自
身の思うところを付度なく自由に、先
生にもはつきりと発言なさる。京都な
らではの言葉と地名が飛び交い、脱線
も大いにあるこの会が21年も続いてい
るのは、ひとえにおおらかでチャーミ
ングな田島さんのお人柄と丁寧な指
導ゆえと見た。当日は句会のあと二次
会、三次会とご一緒させていただいた
が、皆さん、口々に「講座に出れば元
気をもらえる」、「先生のこの講座が続
く限り参加したい」と。相思相愛の実
に気持ちのいい会だった。(木戸敦子)

井上進様

『「生きる」と言うこと』 『記憶の記録』

(千葉県・船橋市)

一昨年と昨年、半年間の間に『生きる』と言うこと』と『記憶の記録』という2冊の大作のエッセイ集を出版された井上進さまが5月24日に来社され、お話をうかがいました。

Q 2冊を出版しようと思った経緯から

昔から書くことは好きで、作文の成績はよかった。日記に書いたり、友だちのメルマガに投稿したりしていたが、読者の反応が少ないことに物足りなさを感じたことと、やはり電子より紙の文字を読んでほしい、という思いが募っていった。また、現役の55歳のとき自叙伝を書き始めたが阪神淡路大震災が起き、当時勤務していたメルセデス・ベンツで救援活動の一端を担っていたこともあり中断し、そのままになっていた。



▲「子どもが生まれたみたい、文字通り抱きしめたい本となった」と笑う井上さん

Q その続きをということ?

言い古された言葉だが、自分の「生きてきた証」を何らかの形で残したい、「人生は一冊の本」という思いを持っていた。体験した様々なことを、難しく考えずに表現すればいい、表現することが生きることにつながると思った。何よりも、記録に残したい3つの大きな出来事があった。それは、生死を分けた広島での被爆体験、地下鉄サリン事件、心筋梗塞。

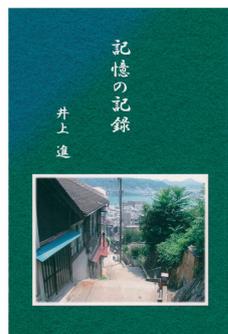
3歳から東京の親元を離れ、尾道の祖父母のもとで暮らし、広島へ転校した小学校2年の時、爆心地から25kmで被爆した。一瞬、ヘッドライトのような光を浴び、あとは意識を失った。幸運なことに防空壕に吹き飛ばされたため、今こうやって生きている。当時、一緒に勉強していた多くの人は亡くなった。

地下鉄サリン事件の日、事件の起きた1本あとの電車に乗っていた。何が起きているのかわからないまま別の電車で出勤すると、ホームや駅周辺には多くの悶え苦しんでいる人がおり、救急車が行き交っていた。

心筋梗塞の際には「あと30分手術が遅れていたら命はなかった」と言われ、この頃に日本尊厳死協会に入会した。

Q なぜ日本尊厳死協会に?

入院した際、治らないのに辛い治療をしたり、ただ生きているだけの姿を見た。回復の見込みがないなら、最後は自然に安らかにその時を迎えたいという、自分の意思を元気なうちに記しておくのがリビングウイル(生前意思)。2009年に入会し「尊厳死の宣言書」



▲原爆ドームと尾道の写真が自身の人生を語っているという2冊のエッセイ集

に署名した。不要な手術や胃ろう、家族への負担という不安から解放され、入会して気持ちが無くなった。葬式は一切不要、葬送は家族だけで散骨し、友人たちへの連絡は、差出人は妻の名前で「〇月〇日夫は永眠しました」と、あとは亡くなった日にちを入れ、三ヵ月後に投函すればいいことになっている。死を考えることで、それまでは元気に、前向きに生きていこうと思える。

Q 今の原動力は?

基本的には人が好き。だからつい世話役を引き受けてしまう。個人的なことでは、高校の同級生のウォーキング仲間20人弱を連れ、30年以上、奥入瀬、京都など60回全国を歩いた。下見から企画、連絡、実施後は旅行記を作って郵送した。最後は修了式も実施したが、当時の旅行記を読んでは「ここに連れて行ってもらった」「あんなことがあった」と皆が宝物だと言ってくれた。大学のクラス会も60年間幹事を務めた。読書、旅、映画鑑賞、囲碁、俳句と

多々ある趣味の中でもこの「歩く」とが何より大きな力となった。

Q 四国八十八か所を歩かれたとか

ただ歩くのではなく42日間一歩一歩が心の修行だった。野宿したこともあれば、無料で泊めてくれたところもあった。でも歩き通せたのは自分一人の力ではなく、ものすごく優しいもてなしがあったから。あの時の苦労が後の様々な悩みから救ってくれた。また道中出会った、阪神淡路大震災で心に深い傷を負った人、自殺の場所を探しに来たという人、四国に来て剃髪した若い女性との話は、何にも代えられない教訓となり、以来毎日仏壇に「般若心経」を唱える様に。この時の得難い経験は、生きていく価値を教えてください。

Q これからは

この本をまとめたことにより、40年余り記した日記を徐々に処分している。でも日記は捨てても自分の人生は捨てません。これを境に、生き続けようというファイท์が湧いた。この2冊を携えて、過去を振り返りつつ将来に向かって一日一日を淡々と有意義に過ごしていきたい。

★小学2年生の時の強烈な被爆体験

以来常に「生きる」ということを突き付けられての、井上さんの人生という旅路。「どう生きるかを考える時、品格と気品、優雅さを心がけ、常に感謝と凛とした勇氣ある謙虚さを目標に精一杯暮らして行こうと思う」(エッセイより抜粋)。よく死ぬことは、よく生きること、まさにその具現者であった。(木戸敦子)

投稿作品

※誌面の都合上、300作品を超える投稿があった場合、掲載はお一人さま1作品、
先着300名様までとさせていただきます。今回の投稿作品数は、266でした。
※しめきり 2018年7月13日(金)まで ※作品は原稿どおりに掲載しております。

川柳

- 1 見舞客「お手玉あそび」して帰り
石原 岳(群馬県)
- 2 雨の日はぬり絵おり紙年がバレ
細川光子(栃木県)
- 3 ジャンケンの結果あなたを看取り
ます
木村洋一(新潟県)
- 4 前かがみ杖を突いても子を案じ
守屋高雄(岩手県)
- 5 口飲みがお作法ベツトボトルの茶
丸山芳夫(東京都)
- 6 古里の西瓜は何故か笑い好き
鈴木義雄(福島県)
- 7 孵卵器で生まれて親の愛知らず
濱田イサオ(福岡県)
- 8 明日も又元気に生きて老犬よ
大橋絵代(千葉県)
- 9 周プーチン皇帝二人知恵くらべ
阿部 至(埼玉県)
- 10 求人難面接官の頭が低く
近藤富夫(東京都)
- 11 昭恵さん安倍麻生黒四月馬鹿
原 崇雄(埼玉県)
- 12 下積みで終る人生それも良し
山口千鶴子(東京都)
- 13 「てにをは」が活きて会話の橋にな
る
長谷川庄二郎(千葉県)
- 14 春バテやホカロン貼ったり外したり
奥那於子(大阪府)
- 15 自販機タバコ丸投げ写経す
岩崎政弘(岡山県)

俳句

- 16 できること奪われてゆく老いてゆく
小山恵美子(大阪府)
- 17 遍路たび満願できて涙する
久保壽雄(北海道)
- 18 「ウミ出し切る」ならば証人喚問を
橋本世紀男(東京都)
- 19 老人会薬でしめてどっこいしょ
大久保アヤ子(東京都)
- 20 時々妻が打ち出す変化球
鏡たか子(山形県)
- 21 決断の一押しをする妻の笑み
目黒豊光(福島県)
- 22 陰口の頑固身につく親譲り
守安幹男(岡山県)
- 23 パンのみに隔世の感万愚節
有坂馨園(福島県)
- 24 青空へあつけらかなと葱坊主
片山茂子(埼玉県)
- 25 番傘の家紋著けし春の雨
中島光江(埼玉県)
- 26 髭面の眼和みて明日母港
林 克(福島県)
- 27 純白き愛咲きてふるさと藤の昼
松田重信(埼玉県)
- 28 碧天のひかり啜へて落雲雀
川口 襄(埼玉県)
- 29 聖五月誰に気兼ねもなき余生
井原穂子(東京都)
- 30 葉桜や百才達はあといくつ
檜山柚子香(東京都)
- 31 晩年や幸せ彩の濃紫陽花
内河邦久(東京都)
- 32 寂光をまとひ辛夷の開かむと
平山千江(岩手県)
- 33 うららかなや妻を連れ出す美容院
古谷 力(東京都)
- 34 戸を練れば鳶尾草の白煌めきぬ
天野輝子(東京都)
- 35 苺こそ日の光なり命なり
五味田幸夫(東京都)
- 36 青年の門出洋々風薫る
川嶋法子(東京都)
- 37 末の子はすねて泳がず鯉職
佐藤儀雄(北海道)
- 38 花藤のすだれを頬で割ってゆく
青木日出男(群馬県)
- 39 恋抜きの長き付き合ひ野に遊ぶ
高崎登喜子(東京都)
- 40 雨上がるとき鳴き初むる遠郭公
杉原明子(静岡県)
- 41 春の日の埃塗れの三輪車
浦橋渴雪(兵庫県)
- 42 春は行く新芽残して花筏
西條公雄(埼玉県)
- 43 共白髪喜怒哀楽も二輪草
岩村 昇(神奈川県)
- 44 賓頭廬の膝の円みや坂薄暑
椋本望生(大阪府)
- 45 重ねたる馬輪懐へば花は葉に
大谷 茂(埼玉県)
- 46 白薔薇や此の頃心して歩む
青木ケン子(埼玉県)
- 47 雨桜兜太を聴きに学士院
松尾らん(東京都)
- 48 よく笑ふ少女まぶしき更衣
村田吉雄(東京都)
- 49 かまくらへ熱きラーメン届きけり
田野倉くにお(東京都)
- 50 富士山を見上げて遊び蝸牛
湯浅芳郎(岡山県)
- 51 一抹の雲去りゆけり蝌蚪の水
小澤円梨(静岡県)
- 52 古稀の日も恋せし頃も合歡の花
磯部 力(新潟県)
- 53 風を連れそぞろ歩きや新樹光
佐々木素風(新潟県)
- 54 行く春の時計塔よりオルゴール
堀田寿美子(北海道)
- 55 ポケットに露の臺ある散歩道
井上静夫(栃木県)
- 56 春眠に目覚め在所の天井画
三津木俊幸(千葉県)
- 57 みちのくの汚染土眠る雪の下
山崎吉晴(群馬県)
- 58 二等辺三角形の花筏
二瓶邦枝(埼玉県)
- 59 夏の月能楽堂に笛響く
津田忠彦(岡山県)
- 60 仮りの世に生かされてをり紙風船
橋本良子(埼玉県)
- 61 人生が始まったまぢ一年生
五十嵐陸博(新潟県)
- 62 潮風にめぐめてかしく野水仙
大塚徳子(埼玉県)
- 63 花の日や死ぬより病むを怖れけり
大久阿雅子(埼玉県)
- 64 花の雲青空澄みし城跡や
田中恵美子(山形県)
- 65 息つめて渡るつりはし山笑ふ
高松玲子(埼玉県)
- 66 今朝は会えないハナミズキの似合う
人
白松いちろう(千葉県)
- 67 ちゃんばらの遊び場となる菖蒲風呂
長峰正晴(千葉県)
- 68 桜餅ひとつは夫の佛前に
堅田秀子(東京都)
- 69 九条を変ふるべからず花は葉に
鈴木清子(埼玉県)
- 70 菜の花のつづく堤や握り飯
本庄準也(埼玉県)
- 71 噛み切れぬものばかりなる昭和の日
紺谷睡花(東京都)

- 72 リハビリも今日はここまで草の餅
宮宅芳子(岡山県)
- 73 日当たりて土筆の群生歩行する
竹本美美子(新潟県)
- 74 人気無く桜零れる堤かな
門田善二(兵庫県)
- 75 音がして傘さして知る春の雨
水落重武(新潟県)
- 76 金になり銀に返して芒原
阿部徳夫(宮城県)
- 77 春風に色迷ひをり写生の子
中嶋清子(佐賀県)
- 78 春告げる鬼太鼓の勇姿かな
大橋恒次(新潟県)
- 79 鷹鳩と化す稲取の足湯かな
佐野和彦(静岡県)
- 80 露味噌や母の味には及ばねど
杉村美保子(岩手県)
- 81 父の日や立志のすすめ振り返る
田中 昶(鳥取県)
- 82 若草を傍若無人に犬の声
岩田 信(神奈川県)
- 83 長き日の衣桁の黒衣出し入れす
清まさし(静岡県)
- 84 たかなや豊饒たるにやまを掘る
小島岳青(新潟県)
- 85 長屋門くぐれば庭の緑立つ
中田文子(大阪府)
- 86 薫風や話し上手に聴き上手
小林七重(新潟県)
- 87 梅雨空に一善の笑み恙なし
九法活恵(埼玉県)
- 88 春暑し疾うに越えたる父の歳
近藤薫也(千葉県)
- 89 いざさらば桜の下をただ歩く
若月理依子(新潟県)
- 90 慰霊の日人間なんだ人間よ
福岡 悟(東京都)
- 91 善福山禪師墓碑に花の舞う
大場岬月(長野県)
- 92 谷間よりさえずり響く蔵王山
古閑智子(神奈川県)
- 93 色鳥のまた来ておりぬ凶鑑見る
鈴木蝶次(宮城県)
- 94 春の星この靴とてもはきやすい
白戸麻奈(東京都)
- 95 少年は恋秘めしまま卒業す
関山恵一(神奈川県)
- 96 春湖畔天幕を張る家族かな
神 一男(静岡県)
- 97 清明の日花野待たずに友が逝く
藤井春三(埼玉県)
- 98 白牡丹確と大空捉えけり
道給一恵(埼玉県)
- 99 地潤す翡翠の光苗木植う
居原田暹(大阪府)
- 100 ちゃぶ台に若き父母昭和の日
吉里ひとみ(東京都)
- 101 息かけて磨く眼鏡や花曇
重原爽美(新潟県)
- 102 若葉萌えその影うつし花筏
長谷部喜代子(大阪府)
- 103 鮎釣りの男流れの杭となる
寺内 信(埼玉県)
- 104 漫画でも字を読むが良し小春の日
浅海和代(東京都)
- 105 プレゼントなしの父の日寂しくて
湯浅暉子(石川県)
- 106 うぐいすと父母に念仏となえけり
中村康浩(福岡県)
- 107 風こぼれローランサンの夏近し
上村元義(神奈川県)
- 108 ばっけ味噌春一番の山の味
斎藤博洋(秋田県)
- 109 満願の朝をひらりと紋白蝶
寺川銀次郎(兵庫県)
- 110 足腰が日課の要青き踏む
日名子春実(群馬県)
- 111 広げゆく若葉の香り千の風
松前邦広(千葉県)
- 112 宿坊の豆腐つくしや春の雨
一瀬正子(埼玉県)
- 113 山笑う野越え山越え美術館
井田由利子(宮城県)
- 114 青蛙掌にのせてみる駐輪場
星 一子(神奈川県)
- 115 三陸の復興遅々と散松葉
村山徳英(埼玉県)
- 116 山路来て春満月の旅の宿
永田歌子(埼玉県)
- 117 求愛の雀のダンス桜桃忌
中野勝子(鹿児島県)
- 118 花片がおもしろかしく転がりぬ
服部八重子(東京都)
- 119 春光や一步踏み出す学びの場
岡村君枝(茨城県)
- 120 荒田にも等しく梅の雨降りぬ
平林義康(兵庫県)
- 121 いい人に会って別れて春惜しむ
望月哲土(東京都)
- 122 しゃぼん玉一瞬かがやく今を生き
早乙女文子(埼玉県)
- 123 信長や何思い冬金華道
杉本敬治(愛知県)
- 124 薫風や産土の森朱鷺立てり
中川義彦(新潟県)
- 125 陵の九重ざくら雨無残
中山日出子(大阪府)
- 126 みどり兎の寝息に風の緑なかな
本間 進(新潟県)
- 127 春愁や雲はいつしか母の顔
本間ミネ(新潟県)
- 128 さまざまな出合ひの季節四月かな
青木涼子(埼玉県)
- 129 のどかなり仔猫のあくびうつさるる
梶 鴻風(北海道)
- 130 春爛漫喜怒哀楽と大手振り
田野井一夫(栃木県)
- 131 のほほんと鳴いてをります老い鶯
大窪美代子(大阪府)
- 132 すべり台バアバもいっしょね孫四才
黒岩正子(埼玉県)
- 133 新婚時代遙か豆の飯
油谷博子(兵庫県)
- 134 柏手のよく響く日や鳥雲に
藪原保子(東京都)
- 135 父の日やちよつとお洒落な格好して
齊藤安弘(神奈川県)
- 136 水芭蕉白き炎ほたの潔さ
瀬野東子(新潟県)
- 137 早蕨の疑問符ひらく風薫り
井上氣海(広島県)
- 138 道険し猩猩袴あをさめる
橋爪真由美(新潟県)
- 139 尺蠖や急ぐ旅でもなかるうて
白川 博(新潟県)
- 140 桜見の宴もたけなわ花吹雪
河野静子(埼玉県)
- 141 一羽のみいつも遅れて雀の子
佐藤 信(神奈川県)
- 142 薫風に飛び乗る名前選挙です
清水君江(埼玉県)
- 143 入学時飯米通帖持参する
菅井文男(新潟県)
- 144 平和なり善男善女花の下
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 145 水ビストルしやぼん玉打つ小豆大
光成高志(千葉県)
- 146 縄とかれ風のほほずり庭木の芽
柴田恵美子(北海道)
- 147 いとけなき植田に赤き入日の矢
安田芳江(茨城県)

- 148 ごきぶりを打つためのみに停止する
若林卓宣(三重県)
- 149 生かされてホーム生活チューリップ
宇田川正雄(埼玉県)
- 150 表札をはずせし門や緋のつつじ
中澤寿美(神奈川県)
- 151 青嵐下りホームの発車かな
高垣勝代(大阪府)
- 152 おぼろ夜の声ふりしほり演歌かな
沖 惇子(大阪府)
- 153 天翔るくるりくるりと夏燕
溝畑美代子(埼玉県)
- 154 やりかけの仕事抱えてはや米寿昔は
年を思わざりけり
山口静一(東京都)
- 155 三万日生ききて思ふ子孝行惚けず寝
こまず騙されまいぞ
黒澤正行(福島県)
- 156 青年の主張を聞いて涙する光る心根
誰が育む
北澤実夫(東京都)
- 157 通過する列車を追いて桜花無人の駅
のホームに流れ
桑原謙一(群馬県)
- 158 南天の実の中に建つ方代歌初恋のう
た南天のうた 土屋喜雄(山梨県)
- 159 古巣にて早くも抱卵ジジ待つ如キジ
バト番いよ余命は我先
早坂絃司(北海道)
- 160 己が死を見とどくるがに瞠りつつわ
が愛犬の息は絶えたり
高橋卓二(新潟県)
- 161 白銀にかまくらづくり興ずれば道行
く人はカメラに収め
宇都木安子(東京都)
- 162 合格も汝念じし大学に進学したりそ
こでゆるむな 高須 孝(愛知県)
- 163 初春の庭花を愛でつつ草を引くいつ
しか時の過ぎゆくまに
渡部美代子(山形県)
- 164 夫の手をさすればいつか人肌のぬく
もりつつたうことの嬉しき
佐伯セツ子(香川県)
- 165 文机にビー玉二つ転がりて兄が遺し
し少年の宇宙 寒川靖子(香川県)
- 166 慈とあらわれ数歩あるけば無限悲に
ふいにおちこむ無著像かな
安部 哲(新潟県)
- 167 若葉色増す日々夫の知らずして我家
の緑スマホで見る
濱崎祥子(鹿児島県)
- 168 微かなる泣声漏るるベランダに温き
風受け産着揺れをり
夏井寛治(新潟県)
- 169 出かけようお一人様のぶらり旅四ツ
葉のクローバー見つかるといいな
阿部澄江(宮城県)
- 170 たましいの抜けゆくような心地して
エレベーターの一隅のわれ
北岡 晃(兵庫県)
- 171 命日の墓前に響くがびちょうの高ら
かな声聞く春の朝
峯岸信子(東京都)
- 172 春うらら花に寄り添ひひらひらと無
心に遊ぶ蝶羨まし
久本にい地(岡山県)
- 173 風に散る花びら地上でくると踊
り出すみるいとおしさをり
大鳥居牧子(東京都)
- 174 土手くれば野道いっはい草茂るむら
さき光る大ふぐりなり
中沢敬子(千葉県)
- 175 喜寿すぎて捨てれば暮らし楽になる
なれど心ときめく想い出ばかり
合田浩子(茨城県)
- 176 ひばり鳴きカラス飛びかう初夏の空
のんびりすわり電車待つかな
高橋登志子(新潟県)
- 177 居ましたかいつ顔出す友の顔ふと
思いおり今日も休日
田中豊恵(新潟県)
- 178 古の良寛和尚かくあらめ清げなる
僧麗しの山 中村万年青(京都府)
- 179 幼顔残る旧友集りて喫茶店でのお喋
り尽ぬ 西山知子(岡山県)
- 180 子の贈りし杖を頼りに庭先を二三歩
あるく如月の朝
山田良男(埼玉県)
- 181 年を経て姉と訪ねし故郷の群馬の桜
は長閑に咲ける
関原幸子(東京都)
- 182 老いの身をむち打ち夕べの散歩道励
ましくれる一すじの雲
魚住潤子(奈良県)
- 183 春潮の豊かに寄するしまなみの海峡
つなぐ美しき橋よ
内藤明子(東京都)
- 184 抱擁の場面に拉致がよみがえる老い
たる父母に届け吉報
岩崎令子(大阪府)
- 185 ソプラノのヒバリに和するウグイス
とキジのベースで初夏は沸き立つ
高田實貴男(群馬県)
- 186 我が妻が白内障になりつれ立て眼科
に通い手術に立ち合う
新井 賢(埼玉県)
- 187 道端のタンポポの綿毛よく見れば幾
何学模様の何と美し
早坂保文(宮城県)
- 188 廃校の砂場に埋めた金ボタン春いく
たびか街の静けさ
坂元正憲(東京都)
- 189 ついて行く上級生はたのもし
石原 岳(群馬県)
- 190 仲よしや霞渡りし通学路
片山茂子(埼玉県)
- 191 大樹の囀児らの未来平和
松田重信(埼玉県)
- 192 新入生の弾む足どり一、二、三
井原穂子(東京都)
- 193 雨上りみんなで帰るたんぼ道
檜山柚子香(東京都)
- 194 一列に集団登校水温む
平山千江(岩手県)
- 195 初めての遠足はどこ先生と
天野輝子(東京都)
- 196 ついてこい！今日から俺は六年生
川嶋法子(東京都)
- 197 初夏の空映すあぜ道ランドセル
鈴木義雄(福島県)
- 198 ランドセル跳ねてスリッパ風光る
佐藤儀雄(北海道)
- 199 一年生早苗田の畔転ぶなよ
青木日出男(群馬県)
- 200 田水張る黄色い帽子は一年生
有田裕子(北海道)

短歌

こちらの写真を見て詠んでいただき
きました。



(写真提供：中川三郎さん)

フォトイック

- 201 野の草に集団登校の列乱れ
高崎登喜子(東京都)
- 202 花ぐもり課外授業の田圃道
岩村 昇(神奈川県)
- 203 通り過ぐ子らを見送る葱坊主
椋本望生(大阪府)
- 204 登校の傘の離せぬ梅雨に入る
小澤円梨(静岡県)
- 205 春愉し期末テストが終ったぞ
三津木俊幸(千葉県)
- 206 早苗田や黄色帽子一年生
山崎吉晴(群馬県)
- 207 見晴かす山は霞みて植田原
津田忠彦(岡山県)
- 208 学童の影を水面に植田風
橋本良子(埼玉県)
- 209 山も木も田圃の水も故郷だなあ
五十嵐陸博(新潟県)
- 210 春がすみ傘を用意の登下校
宇都木安子(東京都)
- 211 農道を黄色連ねて登校す
大阿久雅子(埼玉県)
- 212 登校の歩みに合はず暮の声
長峰正晴(千葉県)
- 213 背のおやつ早く食べたいよおもしろいな
渡部美代子(山形県)
- 214 班長につげ童子の兵隊さん
佐伯セツ子(香川県)
- 215 霊山を据ゑて代田の水鏡
本庄準也(埼玉県)
- 216 一年生大地を踏んで学校へ
濱崎祥子(鹿児島県)
- 217 兄ちゃんの後に続く黄カバン
水落重式(新潟県)
- 218 ねえ先輩もつとゆつくり頼みます
阿部澄江(宮城県)
- 219 先輩についていきますどこまでも
阿部徳夫(宮城県)
- 220 梅雨晴の傘は玩具となりけり
佐野和彦(静岡県)
- 221 がっこうへゆくのはやめてあそぼうよ
長谷川庄二郎(千葉県)
- 222 メダカ言う遠足の子も並んでる
奥那於子(大阪府)
- 223 田の畦の細き土手落ちると水の中
清まさじ(静岡県)
- 224 のんびりと空気はうまし田舎道
岩崎政弘(岡山県)
- 225 先頭は兄しんがりは青ガエル
柳堀悦子(埼玉県)
- 226 水を張り明日は日和の田植かな
九法活恵(埼玉県)
- 227 ランドセル背負う子に幸祈る老い
久本にい地(岡山県)
- 228 梅雨の空晴れてきそうと蛙鳴く
小山恵美子(大阪府)
- 229 その日まで歩け学べよ子供の日
近藤薫也(千葉県)
- 230 あげ道をカエルにお早よう元気良く
大鳥居牧子(東京都)
- 231 黄帽の風薫ることアンビシヤス
福岡 悟(東京都)
- 232 ランドセルの夢が揺れてる梅雨晴間
鈴木蝶次(宮城県)
- 233 ぶかぶかで手つなぎ走る一年生
坪田勝秀(鹿児島県)
- 234 田水澄み軽く弾むやランドセル
神 一男(静岡県)
- 235 始業ベル畦を近道急ぐせくと
藤井春三(埼玉県)
- 236 水田に顔写しては登校す
居原田暹(大阪府)
- 237 梅雨晴間一列に行くたんぼ道
橋本世紀男(東京都)
- 238 ランドセル肩こり腰痛注意して
合田浩子(茨城県)
- 239 田水張る道ゆく兒らは学年順
寺内 侖(埼玉県)
- 240 田植え済みすくすく育て子供達
高橋登志子(新潟県)
- 241 田舎にはこんな時代もあったつけ
田中豊恵(新潟県)
- 242 雨上がり楽しい下校春景色
松前邦広(千葉県)
- 243 雨上り皆んな仲良し下校中
西山知子(岡山県)
- 244 ピカピカが足並そろえ一、二、三
鏡たか子(山形県)
- 245 春田道並んで登校ランドセル
井田由利子(宮城県)
- 246 入学おめでと雨やんでよかったね
星 一子(神奈川県)
- 247 傘脇に行く一列のランドセル
目黒豊光(福島県)
- 248 代田道その昔たぐる故郷かな
村山徳英(埼玉県)
- 249 下校児の一団みだれ蝌蚪の国
中野勝子(鹿児島県)
- 250 リュックの子等元気を写す春の水
岡村君枝(茨城県)
- 251 帰る兒を見守り畦の夏木立
本間 進(新潟県)
- 252 青田道気張る未来とランドセル
北野耕兵(千葉県)
- 253 登校の新入生の歩幅なほ
山田楽山(埼玉県)
- 254 登校の子らを見送る山うらら
関原幸子(東京都)
- 255 畦青みたんぼぼ色のランドセル
梶 鴻風(北海道)
- 256 意気揚揚通学みちの代田かな
大窪美代子(大阪府)
- 257 早苗田のはじらうほどに足を上げ
黒岩正子(埼玉県)
- 258 古郷や小鮒と駆けっこ小学生
油谷博子(兵庫県)
- 259 新緑や先輩まねる一年生
齊藤安弘(神奈川県)
- 260 ランドセルつらねし歩く帰り道
河野静子(埼玉県)
- 261 ランドセル心も踊る帰りみち
中林恵子(大阪府)
- 262 もうなれたお手々つながらずそれぞれに
石尾曠師朗(東京都)
- 263 故郷の好きな景色や山と畦
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 264 下校時の道草たのし一年生
岩崎令子(大阪府)
- 265 皆傘を持ちて登校植田道
安田芳江(茨城県)
- 266 早苗風ゴールはすぐよ一、二、三
菅原キイ子(宮城県)



俳句・川柳募集!!

(写真提供：中川肇さん)

上の写真から、自由にイメージし五七五(俳句か川柳)で表現してください。応募はアンケートハガキ投稿欄にて。お待ちしております!



「投稿作品で心に残ったものは？」の問いに、たくさんの回答をお寄せ頂きありがとうございました！その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。
※大賞と自句自解コーナーは年1回です。

◎俳句部門

112 卒業子島に一礼島を去る
本間 進(新潟県)

・きっぱりした句。だんだん島が淋しくなりますね。止むを得ないことだが日本全体の問題 岩村 昇(神奈川県)
・田舎に居るのは老人多く、一極集中でしょうか 田野倉訓郎(東京都)・生まれ育った島へ感謝の一礼！まさに旅立ちの一齣ですね 大阿久雅子(埼玉県)・例えば佐渡。心のこもった一句。卒業子に幸あれと祈るや切 小島岳青(新潟県)・島の学校で学び巣立ち行く日一礼をして島を去る様子 道給一恵(埼玉県)・故郷の島に一礼して島を去る、人生の切ない一こま。豊かな人生であれと祈り、卒業子を見送る教師の感慨が胸に迫る 村山徳英(埼玉県)・島を去ることも達の気持が良くわかります。また佐渡にもどつておいで！！ 中川義彦(新潟県)・自分を育ててくれた島に感謝の一礼をし希望を胸に前を向いて旅立つ若者を彷彿とさせる良い句です 清水君江(埼玉県)

101 九条を守れと撒くや鬼は外
中野勝子(鹿児島県)

・今大きな声で叫ばないと 大橋絵代(千葉県)・命の尊さ、大切さ「教え子」を戦場におくるな」将にその通りです 阿部澄江(宮城県)・この句に私も同感。戦争の恐ろしさは子供の時より痛感。鬼より何倍も恐ろしい戦争を体験し昔より何倍も恐ろしい核戦争？起こらないよう心から平和を祈る 松前邦広(千葉県) 私の父は戦死しましたので切実に九条を守れと思います。これ

から豆播きはこの句でします 中山日出子(大阪府)・「武力を持たない」と言うことは敵を作らない事である 田野井一夫(栃木県) ほか

27 俳句とは暮らしの一部春立てり
井原毬子(東京都)

・暮れては明け、命永らえる大いなる糧でもありましょうか 有坂馨園(福島県)・春立てりがきいていると思います 片山茂子(埼玉県)・お人柄がうかがえる。俳句が苦にならないってうらやましい 天野輝子(東京都)・全く同感です。この暮し満足しています 日名子春実(群馬県)・実感です 大窪美代子(大阪府)

◎短歌部門

134 重みなき首相の言葉丁寧に真摯にと云うに遠き答弁
桑原謙一(群馬県)

・真清水も澱めば腐る官邸も 黒澤正行(福島県)・安倍首相の政治姿勢を鋭く突いた時事詠。同感です 久本に地(岡山県)・誠実さを感じさせない口先だけの対応に、政治の劣化ここに極まれの感です 橋本世紀男(東京都)

158 免許証返納せしと同級生我も早晩これに做ふか 久本に地(岡山県)

・運転免許証を持たぬ私ですが、事故の多さに驚いています。どうぞそのようにしてください 鈴木蝶次(宮城県)・80才までと思っていました、田舎は隣も畑も町も歩いて行くのが大変でつい延び延びにしていますが今度は田中豊恵(新潟県)・久本さんの歌

では現実として身につまされます 西山知子(岡山県)

◎川柳部門

171 春よ来い笑い袋を提げて来い
渡部美代子(山形県)

・今の世は平和だという人も居るが次々と集団殺人、悲惨な子供の実態。嘘とウソに隠された政治家の「嘘とウソ」。本当の春、待ち遠しい 松田重信(埼玉県)・川柳らしく気持ちがよい 内河邦久(東京都)・厳しい季節から早く脱したい気持ちを川柳に上手に託して、参考になる一句です 長谷川庄二郎(千葉県)・笑い袋がいいですね 中林恵子(大阪府)

173 手足まだ動く今日することもある
小山恵美子(大阪府)

・今日行くところがあり今日することがある。生きがいのある生活です 木村洋一(新潟県)・老いても何かをしようとしている 守屋高雄(岩手県)・行く所、する事の有る今日一日の幸を感謝ですね。草を引きながら思います 菅原キイ子(宮城県)

◎フォトイック

今回大賞はありませんでした。

◎他にも

40 すくもから一つづつ出す寒卵
岩崎政弘(岡山県)
45 露の臺疎遠となりし家郷かな
田中 昶(鳥取県)
49 跡を継ぐ者なき畑やきぎす鳴く
関山恵一(神奈川県)

62 のどけしや目の前にある河馬の尻
小林七重(新潟県)

83 母の寝息置いて厠へ春の星
高垣勝代(大阪府)

87 鼻ぺちやの人形焼きや春炬燵
一瀬正子(埼玉県)

122 夕風の粗くなりたる露の臺
藪原保子(東京都)

133 白鳥の親はうす茶の子の脇に赤城
風を遮りつつ浮く
青木日出男(群馬県)

136 開拓にいそしみ生きて三万日お
らー東京海もしらねー
黒澤正行(福島県)

141 ねむりおる夫のひたいにそっと手
を細く目を明け少しほゝえみ
佐伯セツ子(香川県)

164 ふりかかる火の粉をあびて春待ち
の古都あかあかと修二会終りぬ
岩崎令子(大阪府)

179 うかうかとしている内に高齢者
山口千鶴子(東京都)

180 引っ越してから善い人になる隣
長谷川庄二郎(千葉県)

188 どっこいしょ！声ほど出ないうで力
和崎治人(山口県)

197 鳥籠の下に零れ餌寒雀
山崎吉晴(群馬県)

205 青い空自由に翔んでる夢を抱く
小山恵美子(大阪府)

215 薫風や風がこんなに着いの
橋本良子(埼玉県)

228 いつまでも過保護にしないで春空へ
神 一男(静岡県)

※今後もふるってご投稿をお願いいたします！

Q 前回のアンケート
6月17日は父の日。
今、父に言いたいこと。



- ・ありがとう
中島光江(埼玉県)
宇都木安子(東京都)
九法活恵(埼玉県)
坂元正憲(東京都)
永田歌子(埼玉県)
感謝して
門田善二(兵庫県)
父の子でよかったよ。ありがとう
中野勝子(鹿児島県)
あなたの娘に生れてありがとう
高垣勝代(大阪府)
父の日や父の娘でよかったと
吉里ひとみ(東京都)
子煩悩だったね。ありがとう
細川光子(栃木県)
かわいがってくれてありがとう。
宮宅芳子(岡山県)
お父さんありがとうとひとこと生前に言いたかった 稲葉民雄(千葉県)
健康に産んでくれて感謝しています 魚住潤子(奈良県)
育ててくれて感謝
杉本敬治(愛知県)
本間ミネ(新潟県)
いいところも悪いところも似て感謝です
有田裕子(北海道)
働くだけの毎日だった父に感謝、感謝。
中林恵子(大阪府)
家族を守りぬいた父に「ただただ有り難う」 田野井一夫(栃木県)
「真面目に、謙虚に」を教えてください
有難う 松尾らん(東京都)

- ・「毬子」という名前をつけてくれてありがとう。愛を感じています 井原毬子(東京都)
・今の幸は父よりと思っています 榎山とり子(東京都)
・真に信じてくれて有難う 内河邦久(東京都)
・寛容の精神で有難う 五十嵐陸博(新潟県)
・大学までの学費をありがとう(ごさいました) 瀬野東子(新潟県)
・素敵な庭をありがとう 橋爪真由美(新潟県)
・幼いときの肩車ありがとう 土屋喜雄(山梨県)
・よくおんぶして映画館に連れて行って貰った。もう一度映画を見に行きたい 高崎登喜子(東京都)
・お花見に連れて行って呉れてありがとう 六才の時に死んだ父へ 鈴木清子(埼玉県)
・鳥根から来て東京見物をよろこんでくれてありがとう 堅田秀子(東京都)
・「あと5日終戦知らず父逝けり」今平和です。孝行できず残念。立志の教え感謝です 田中 昶(鳥取県)
・遭された一つ一つに亡父の工夫とアイディアが。有難う 目黒豊光(福島県)
・農一筋愚直に生きし父の背中八十路の己の今を感謝す 村山徳英(埼玉県)
・親不孝、生意気な私でした。お詫び、反省、そして感謝 大場艸月(長野県)
・日の丸の旗を振って父を送った。い

- までも父に逢いたい 有坂馨園(福島県)
・「何時までもあると思うな親と金」これほんただったよ！ 高橋卓二(新潟県)
・「痛かったあの拳骨に今がある」おやじありがとう。元気だよ... 石原 岳(群馬県)
・元気でいてほしい 若月理依子(新潟県)
・ケガをした父早く元気になってください 白戸麻奈(東京都)
・またウナギ釣りに連れて行って 坪田勝秀(鹿児島県)
・お酒のみすぎですよ 浅海和代(東京都)
・確かめたかった父のミステリー 松田重信(埼玉県)
・失敗談を聴きたかった 阿部 至(埼玉県)
・祖父母や先祖のことをききたかった 齊藤安弘(神奈川県)
・我家のルーツや苦労話をもう少し教えてもらいたかった 石尾曠師朗(東京都)
・もっと父の人生のいろいろなことを訊きたかった。有島和子(東京都)
・お父さんの言いたかったこと、今聞かせて欲しい 中澤寿美(神奈川県)
・「一緒に台湾へ行きたかったね。」生まれた高雄へ行く約束も果たせなかった 濱崎祥子(鹿児島県)
・美味しい酒を飲ませてあげたかったナ 長谷川庄二郎(千葉県)



- ・もっと近くに嫁に行ってあげれば良かった!! 古閑智子(神奈川県)
・一緒に山登りをしたかった 関山恵一(神奈川県)
・鮎釣りを一緒にしたかった 寺内 侖(埼玉県)
・将棋を教えて欲しかった 阿部澄江(宮城県)
・もっと色んなことを聞いておけば良かった 平林義康(兵庫県)
・温泉で背中をこすってあげたかった 守安幹男(岡山県)
・もっと方々一緒に旅行をしたかった 間森 坦(兵庫県)
・親不孝をごめんなさい 平山千江(岩手県)
・星になってしまった父に種々心配かけた事ごめんなさい 堀田寿美子(北海道)
・反抗してばかりでご免です 原 崇雄(埼玉県)
・親孝行の一つも出来ず済みません 中村久仁子(京都府)
・尊敬しています 居原田暹(大阪府)
・お疲れさまでした 久本にい地(岡山県)
・佐藤 信(神奈川県)
・全盲の母の世話をなされたこと。よくやったね 梶 鴻風(北海道)
・戦争中シベリアに抑留されていて大変だったね 関原幸子(東京都)
・父の齢を越えました 湯浅芳郎(岡山県)
・私、父の亡くなった年令になりました 中嶋清子(佐賀県)



- ・今元気で生きています
奥那於子(大阪府)
- ・御蔭で幸せに過しています
久保壽雄(北海道)
- ・お父さんより長生きしてますよ
大窪美代子(大阪府)
- ・だんだん似てきたよ
白川 博(新潟県)
- ・(父と) 同じ苦労をしています。
岩田 信(神奈川県)
- ・約束した後始末は無事終わりましたよ
近藤薫也(千葉県)
- ・オヤジは沢山焼酎を飲んだな。俺も今オヤジを見習っている
橋本世紀男(東京都)
- ・カラオケで軍歌を歌って亡き父を偲んでいます
沖 惇子(大阪府)
- ・もともと話をしたかった。
仁藤ひろじ(埼玉県)
- ・もともと大人の話をしておきたかった
望月哲土(東京都)
- ・半世紀前に逝った親父。とことん会話をしたかった。とても残念
小澤円梨(静岡県)
- ・子育てで一番つらかった事はどんな時でしたか
大谷 茂琦(埼玉県)
- ・二十三年の時父は他界しそれまで對話が無かったので話をしたかった
井上氣海(広島県)
- ・戦争体験の話を聞きたかった
水落重武(新潟県)
- ・小山恵美子(大阪府)

- ・何故『憲兵』を選んだのかききたかった
北野耕兵(千葉県)
- ・男同士の話をしたい
本庄準也(埼玉県)
- ・気が付けば父に見習い生きてきた
守屋高雄(岩手県)
- ・子規の忌や父と二人の奈良旅行
古谷 力(東京都)
- ・本意な晩年でしたが愚痴をこぼすことなく全うした人生でしたね
桑原謙一(群馬県)
- ・私が三歳の時他界した父の学生時代の写真が見つかった(初めて父の顔を知った)
井上静夫(栃木県)
- ・戦時下には、安眠の夜はなかったと思います。どうぞ安らかに
寒川靖子(香川県)
- ・シベリア拘留の話忘れません
合田浩子(茨城県)
- ・「酒を百葉の長」にして欲しかった
佐野和彦(静岡県)
- ・亡き父はお酒が大好きでした。年を重ねて私も好きになりました
峯岸信子(東京都)
- ・父が私を詠った俳句をプレゼントしてくれました。宝物です。「迎える梅雨なぎさに消ゆる足の跡」
大島居牧子(東京都)
- ・父の生前に俳句を始めていたなら句論議も出来たかも知れないね
井田由利子(宮城県)
- ・お父様と言って見たい、戦死した父話しかける写真はセピア色
大久保アヤ子(東京都)
- ・親孝行したよね、父親が勝手にきめた結婚でしたが添い遂げますよ
田中豊恵(新潟県)

- ・逢ってみたかった
橋本良子(埼玉県)
- ・甘党だったわね、私もよ
天野輝子(東京都)
- ・何故死んだ(新制中学卒業した次の朝早く)
黒澤正行(福島県)
- ・一言「バカヤロー」と。余りにも早過ぎた!
小島岳青(新潟県)
- ・五十四才で逝った父。長生きしてほしかった
濱田イサオ(福岡県)
- ・もう少し長く生きてほしかった
長峰正晴(千葉県)
- ・生き返ってほしい
松前邦広(千葉県)
- ・ゆっくり休んでネ
大橋絵代(千葉県)
- ・小林七重(新潟県)

- ・二十七年も遅れて行った母さんと逢えましたか? 張山てる子(東京都)
- ・天国の父へ「一月にお母さんがそちらへ行ったよ。お待ちどおさま!」
一瀬正子(埼玉県)
- ・あの世で楽しくやってるか
早坂保文(宮城県)
- ・大好きだった新聞雑誌、心ゆくまで読んでいて下さい
本間 進(新潟県)
- ・手先が器用で人に使われるのが長所かな。そちらでも人に盡してください
神 一男(静岡県)
- ・亡父を忘れた事は、一日としてありません
阿部徳夫(宮城県)
- ・お父さんとの沢山の思い出決して忘れませんよ
大阿久雅子(埼玉県)

亡き人を偲ぶことは、亡き人から供養されること



朝倉安都子さん
大谷派僧侶 真宗

毎日のようにお墓にお参りされる女性がいっぱいいます。お嬢さんが20歳で結婚され、ほどなく癌で亡くなられた方で、「お墓の前でお花を整えていると、娘と話しているような気がするんです」とおっしゃって。

「今日は何なことがあったよ...」「あなたが子ども頃ね...」「もし生きていたら今頃は...」。亡きお嬢さんは、微笑みながら現れてお母さんに寄り添い、互いに思い合うかけがえのない時が生まれるのでしょ。亡き人を偲ぶことは、そのまま「亡き人が『大切なお母さん』と呼び掛けてくれる声を聞く」ことです。お嬢さんの声に「悲しいでしょうけれど、しっかり生きてください。私はいつも、あなたと共にいます」と慈しみ深い仏様の声が重なって聞こえますように。亡き人(仏様)からの供養(尊敬し大切なものを捧げる)が届いていますように。

4-5月号へお寄せいただいたお声の一部をご紹介します！皆様からのメッセージが、私どもスタッフの励みです。率直な感想や親身なアドバイス、いつもありがとうございます。皆様のお声で、情報誌「喜怒哀楽」がつけられていきます。

- ・若松英輔さんの「人は真の旅を求める…」の一文はこころに響きました。
- ・毎号菜根譚をたのしみに拝読しております。常に手を抜かない事が自分のためになる事を学びました。
- ・桜田句会を拝読し即吟でこれだけの句を詠まれるとは、世の中には素晴らしい句会があるものだと感心しました。
- ・橋本さん「五七五は命のリズム」、素晴らしいタイトルですね。毎日自然の移ろいや人の動きの中に五七五を見付けてまるで日記帖ですね。
- ・二月号の私の俳句が読者の皆様に認めてもらえて、大変うれしく思いました。これからも頑張ります。
- ・春になると行きたくなくなる場所のご回答に心が浮き立ち沢山の情報もいただきました。
- ・角田山のおすすめ 古希すぎの私でも登れそうですから是非とも妻と一緒に登ってみたい。
- ・子どもと夢の世界 小川未明の童話はよく読みました。秋岡様、四月から大阪へ戻られるとの事。いつも新潟の文化人ご紹介いただきありがとうございます。お元気で活躍ください。
- ・食楽句楽のすすめの中で梅干しを筍の皮に挟んで啜った件、自分も経験があり、今時の子には判るまい。
- ・「ふしぎな奥義」散漫な気分でもなにかをしている時こそもっとも集中できる。良い奥義を教わりました。
- ・もう少し自社の出版した本を宣伝なさっては。

※今号へのお声も、ぜひお寄せください！

新潟ぶらり



❖道の駅花夢里について

国道460号の道の駅。新潟市の中では南東に位置する秋葉区にある。長距離ドライブの休憩というより、花を求めて訪れる人が多いよう。かくいう私の目当ても、玄関先に置く寄せ植えの花苗。

花夢里にいつは、新潟花き総合センターの展示即売所で、新潟市とJA新津さつきが運営している。平成11年10月に総ガラス張りの建物になり、平成15年4月から道の駅としてスタート。年間約60万人が訪れる。

当施設は鉢花・花木を中心に花壇苗・観葉植物・洋ラン・果樹苗木・庭木・盆栽・園芸資材などを販売。生産者の品物が常時2千種類、4万鉢並ぶ。ガラス温室だけでなく屋外売場もあり入り口前から色とりどりの花がとってにもぎやか。生産者が直接花を搬入しており、新鮮なことが特長。最盛期では一日3〜4回の搬入があるという。

新津は花き園芸の地であり、その歴

史は江戸時代からのもの。道の駅入り口には「日本チューリップ発祥の地」の記念碑がある（チューリップの商業販売を全国に先駆けて行ったことから）。いまも花のまちである新津だが、困難もあった。

昭和16（1941）年の農地作付統制規則によりチューリップどころでなくなったり、昭和18（1943）年には食糧増産応急対策要綱が制定されチューリップの球根は食用やでんぷんの加工用になったりした。昭和40年代に入り、やっと花を楽しむ余裕が出てきて需要も増えていったという。

園芸を、花を楽しむことができるのは、平和であってこそ。たくさんの人でにぎわう花夢里にいつは、まさに平和の風景なのだ。（菅真理子）



住所／新潟市秋葉区川根438 電話／0250-21-6633
 営業時間／4月～8月 AM9:00～PM6:00
 9月～3月 AM9:00～PM5:00
 休業日／年末年始（12月31日、1月1日）



吉田東伍の世阿弥発見

伊豆名 皓美

はじめまして。秋岡啓子さんから引き継いで今回執筆させていただきます。「にいがた文化の記憶館」の伊豆名皓美と申します。よろしくお願いいたします。

にいがた文化の記憶館では、7月6日～9月2日まで、企画展示「佐渡の能楽と世阿弥」を開催予定です。日本を代表する古典芸能、能楽。その大成者世阿弥（1363?～1443?）の名は、多くの人が知っていることでしょう。「秘すれば花」「初心忘るべからず」という言葉は、世阿弥の著作『風姿花伝』などに出てきます。この書は能楽の理論書で、日本最古の演劇論といわれています。年齢に応じた稽古の心得、芸道上の心得について書かれており、能楽論でありながらも、現代の私たちにも通ずる人生のヒントがちりばめられています。本書は、世阿弥が後世の能役者に伝えるための秘伝の書でした。秘伝であるはずの『風姿花伝』を、どうして私たちが知ることができているのでしょうか？それは、越後安田（現新潟県阿賀野市）出身の吉田東伍（1864～1918）によって世阿弥の伝書が発見され、広く世に示されたからです。それまでは伝説上の人物とされてきた世阿弥ですが、東伍が『風姿花伝』を含む世阿弥の伝書16種を発見し、校注をつけて『世阿弥十六部集』として刊行したことにより、その実在が明らかになりました。

吉田東伍は、日本初の地名辞典を編纂したことで知られた地名地理学者でもあります。生家は代々々問を大切にする家柄で、家には郷土の歴史を記録した古文書や絵図画などが多く残る環境でした。地元小学校を卒業後、新潟市にあった新潟英語学校に入学。しかし「学校はわかりきったことしか教えてくれない」と13歳で退学します。その後、図書館などで独学、自分の学歴を「図書館卒」と答えています。1895（明治28）年、日本で統一した地誌がないと気付いた東伍は『大日本地名辞典』の編纂を独力で始めます。朝から晩まで机に向かうこと13年間、1907（明治40）年に5千ページ超の大辞典が完成しました。この業績によって、東伍は文学博士の学位を授与されました。

ところで、東伍が謡曲や能の手ほどきを受けていたという記録は残っておらず、なぜ能楽に関心を持っていたのか窺えるものは残っていません。可能性としては、1893（明治26）年に歴史書『日韓古史断』を著しているように、日本と朝鮮半島の文化的つながりを究明することが東伍の課題の一つであったからかと思われます。能楽は6～7世紀頃に中国大陸から伝来した芸能が日本古来の芸能と混ざり合い、長い年月をかけて様々な歌舞を伴い形成されてきました。能楽に対する東伍の興味は、日本と朝鮮半島との関係を考えていたことが動機になったのかもしれない。

東伍の世阿弥研究が評価されるべき点は、世阿弥を文学史上で「作家」として扱うことを主張したことにあります。東伍は、それまで芸能史上で能役者としてしか語られてこなかった世阿弥に対して、優れた著作を残した「作家」だと評価したのです。



▲吉田東伍

【展覧会情報】

企画展示「佐渡の能楽と世阿弥 吉田東伍の世阿弥発見」

会期：7月6日（金）から9月2日（日）

休館日：月曜日（ただし7月16日は開館）、7月17日（火）

食楽句楽 のすすめ(20)

おこぜの唐揚げを愛す

岩田 桂

虎魚オコゼ(夏の季語)という魚を食べたことあります。ないですか。じゃあ食べに行きましょう。ということで佐渡へ鬼のような怖い顔の唐揚げを食べに行くことにします。

二〇センチほどの虎魚(鬼虎魚)を揚げた料理である。現場に座ると、お皿に三匹ほどが睨むような醜い貌をして出てきた。なんとなく哀れをさそう風貌である。

おお、これが噂の虎魚さんか……。その怨むような貌を睨み返して、膝を正しながら決死の覚悟でパクッと頭ごと丸かじりする。バリバリと齧る。無言で噛み砕く。

ところが見た目のグロさと違って、柔らかく繊細で、コラーゲンたっぷりのトロリとした口触りがまた無茶句茶に美味い。何じゃこれは。瞬く間にお皿はからっぽになる。いや、ほんまに旨かったですよ。うむ、この醜い風貌にしてこの美味とは、何とした自然界の悪戯であろうか。こんな鬼のような醜い容姿の魚に、俄然興味が湧く。この虎魚の由来をおやじさんに尋ねてみなければなるまい。

唐揚げのおこぜとならば是非もなし恨みの貌をばりばりと食う

まずは生簀に泳ぐ虎魚を見せてもらった。覗き込むと生簀の底に、石のようにじっと動かない物体が目に入る。背鰭を大きく立てながら、こちらを警戒している様子である。色は灰褐色である。

おやじさんによると、虎魚の背びれには猛毒があるんです。触ると血が噴出し、耐えられない痛みが走るとのこと。スパーでは、あらかじめ痛みを取り除いた状態で売っているとのこと。

新潟以南の日本海側や太平洋側では房総以南に

棲息している深海魚であること。新潟ではオコジョと呼ばれていること、などを教えてもらった。

背鰭には河豚より強い毒があり、ペンチで千切り外してから料理すると言う。河豚と同様に猛毒で身を守っている。ならば虎魚と河豚が喧嘩したら、どちらが勝つか。まあどちらが勝っても構わないけれど。さらに刺身やちり鍋が美味いから食べてみると勧められる。こうなれば今日は虎魚三昧で行くしかない。財布の中身を探ってみる。何とかイケそうなことを確認して、この醜魚様とのひと時の戯れに参加してみるか。

この貌にして三味の鬼魚かな

刺身もちり鍋も河豚を越える美味さ

である。地酒もうまい。おやじさんの話もうまい。こんな贅沢をしていいのか。

そんなコトを巡らしていると、ふと、虎魚伝説の逸話を思い出した。

たしか紀州の熊野あたりでは、山の神にこの虎魚を供えて、イノシシの豊猟や海の豊漁を祈願するという俗信があったことを思い出した。

山の神は醜女であり、人目を避けるらしい。だから自分より醜い虎魚を見ると大喜びして、人々の願いを聞き届けるのだと言う。「山の神にオコゼ」という俗信は、人が好物を前にして喜ぶ様を例える言葉である。となると今のボクは、その山神のものであることになる。まあ、いいか、今だけは、と地酒をぐいーと飲む。

酔うほどに、山の神が恐ろしい醜女と聞けば、さらに妄想が拡がってゆく。もうどうにも止まらない。それはこの山の神の正体は、実は日本書紀に登場するイザナミ姫(黄泉の主宰者)の分身ではないか、という珍説である(まさか)。

イザナミは自分の醜い姿を夫のイザナギに見られ、激怒して醜女の追っ手を差し向けて、イザナギを黄泉から追撃した。イザナギは無事に黄泉から帰還したが、諦めきれないイザナミは、高千穂の

神々が海を渡って上陸したとされる和歌山県の熊野地区に、身を潜めて山の神となった。

そしてその家来の醜女たちが虎魚となって、イザナギを討ち取るために海に住み着かせた。いわばイザナギの首を上げる海兵隊という訳である。山の神が虎魚を見て喜ぶのは、どうもその辺に真意があるのではないか。

どうだろうか、この珍説は。これは珍日本書紀として発表しようと思うのだが、バカにされるか。

怨むなし流人の島の鬼おこぜ

それにしても虎魚に限らず佐渡には、様々な伝説や風習がある。食べものがある。猛毒の河豚の肝の漬物なんてえものもある。「死にはせんから、抓んでみんしゃい」と村人がすすめてくれる。ならばとおそろのおそろ食べてみたが、命に別状はなかった。ホッとした。ただすすんで食べるものではない、これは。

また佐渡には一村ごとに鬼太鼓なる伝統芸能があり、その鬼の数はかなり多い。とにかく鬼がこちらにたむろする。まさに佐渡は鬼ヶ島である。ならば佐渡は名を変え、鬼ヶ島と名乗れば日本有数の観光地として繁盛するのではないか(なるほど)。誰か市長に提言してよお。その鬼たちが虎魚として繁殖していても不思議ではない。

うむ……。何にせよ、初の虎魚料理、堪能させていただきましたあ。虎魚の目に会い、頭から食べてやりました。もちろん二度三度と訪れて出会いたい美味しい料理でござる。

皿にのる虎魚を睨み押しけり

さて佐渡汽船の時間も近づいてきたか。そろそろお暇を請う時間であるか。今日は醜い貌の美味をいただいたではないか。珍説を打ち立てることもできたではないか。

「あーうまかった」というよりも「めっちゃ、面白かった」という珍体験であった。この虎魚探検を是非、後世に残そうではないか。

お客様の困った！
を解決したい

お客様と作品が地元紙 「新潟日報」に掲載されました

4月に当社より出版された岡部清さんの詩集『山のムラから』と、上林洋子さんの歌集『かたくりの花』が地元紙「新潟日報」に大きく取り上げられました。



岡部さんは旧守門村で農業に従事し、高度成長期には出稼ぎ労働者として日本の経済を支えてきました。現在は魚沼市の高齢者生活支援ハウスで暮らしていますが、先祖代々200年守り続けた大地を捨て、転居した自身を「逃亡者」と呼び自責の念に苛まれるといいます。

本書には、姿を変えていく農村への哀歎、社会の矛盾、一人の人間としてもがき苦しんだ心の軌跡が言葉に紡がれています。

上林さんは、長男を出産した27歳で全盲に。朗読図書の「31文字の短歌なら心の中で詠むことができる」の言葉に光を見出し、45年前から短歌を詠んでいます。49歳で盲導犬を迎えてからは、登山にも挑戦するなど行動範囲も広がり、それが短歌にも影響したと言います。本のタイトルは、自身が色を選んで購入した最後の服に由来。

かたくりの花に触れつつ色問えば「かあさんのセーターとおんなじ色よ」

「見えていたら詠めなかった歌。視覚障がい者を理解するきっかけになればうれしい」と話されていました。

本をご希望の方は、当社までお問い合わせください（連絡先は16ページ下参照）。

- 詩集『山のムラから』四六判並製本 102ページ 500円
 - 歌集『かたくりの花』四六判上製本 214ページ 2000円
- （いずれも税込・送料込）



▲詩集 『山のムラから』 ▲歌集 『かたくりの花』

俳句の選句・ 整理サービス承ります！

「句集をまとめたい!」、でも「選びきれない」「どういう順番で掲載していいかわからない」という方に朗報です。

ご希望により、俳句の選句や添削、俳句の整理（歳時記に依り春・夏・秋・冬・新年、各季節毎に時候・天文・地理・生活・行事・動物・植物に区分け、初・仲・晩・三に区分）をし、句集としての体裁を整えます。詳細は同封のチラシをご参照ください。



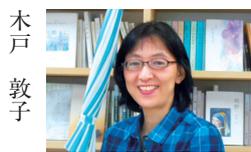
ポストカード販売しています!

春夏秋冬、各季節の草花を大胆に切り取ったポストカードを販売しています。今号(98号)に同封したのは「Venus」。撮影した新潟市在住、高橋ノリユキさんは、「會津八一の歌を映す」第11回秋草道人賞写真コンテストで、審査員特別賞を受賞しました。8枚1セット500円。ご希望の方は、必要分の切手を同封のうえ、封書にてお送りください。



スタッフの一言

Q. 6月17日は父の日。
いま、父に言いたいこと
※夜目、遠目、笠の内でもより美しく!? 明るい色の傘で楽しい気分!



顔も性格もコピーと言われ反発してたけど、そんな愛すべきDNAを受け継いだことうれしく思います。一人になって17年、よくやってきたね。ケセラ・セラの心持ちでこれからも!



これと言って、特に改めて言いたいこともないですが、感謝の気持ちだけは忘れなようにしたいと思います。



いつも見守ってくれてありがとう。お父さんの娘で幸せです。



小さい時は、よく可愛がってくれて、兄から「千秋ばっかり…」とぼやかれたのを覚えています。最良してもらいました(笑)。母も兄もそちらに逝ったのできつとにぎやかですね。



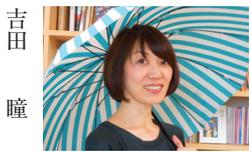
職人気質で気分屋で見た目もいかつかった父。最近小さくなった気がするよ。いつも迎えが来てもいいと言っているけどちゃんと病院行ってね。まだまだ元気であってほしいから。



宴会でやるために腹踊りや皿回しの練習をして祖母にかられたり、ステテコ姿でアコーディオンを弾きながら近所を歩いたり…もうちょっと長生きしてほしいから。



仏壇の父にお線香をあげるのが母でお茶を淹れるのが私。昨日ひよろ長い小菊を2コーティオンを弾きながら、ちょっと切った方が良かったかな。いつも見守ってくれてありがとう。



昔は顔を会わせれば喧嘩ばかりだった父も今や孫に甘い良きじいさん。立場上気苦労が絶えないせいかわいじいさんになってはいるけど、孫が成人してもずっと元気であってね。



6人家族をかなり苦労して支えてくれた父。娘はとても誇りに思っていますよ。いつまでも元気であってほしい! また一緒にドライブ行こうね!



南の島に憧れて

小津夜景

●プロフィール

1973年 北海道生まれ。フランス・ニース在住。
2000年 留学で渡仏。
2016年 句集『フラワーズ・カンファー』刊行。2017年に同句集で第8回田中裕明賞受賞

今日は祝日なので、朝から海に散歩にゆきました。

まだ泳ぐ人のいない時間。海にいるのは釣りをしている男の人たちとカモメだけ。男の人たちは岩場や浮橋に陣どり、潮風の中に椅子をひらいて、手作りのサンドイッチを食べながら、一人の時間をおのおの愉しんでいます。

温暖な気候がこんなにも人生を楽にすると知ったのは、この町に越してきた三十も半ばをすぎてからのこと。食べものが安く、着るものもてきとう、陽はたつぷりとそそぎ、住民はのんき。その上、冬になっても暖房いらず。そんな「地中海の楽園」の味をいったんしめたあとはどんな欲が出て、もっと暖かい南の島はどんなだろう、なんてことばかり想像して暮らすようになりました。ニースは年中うららかではあるものの、アルプス山脈を北に背負い、冬は市バスでスキーに行けるような場所。「地中海の楽園」ではあれど、やはり南の島にはほど遠いのです。

最近ハマっているのはハワイ諸島。ぬくい風。おおらかな波。あふれる花々。やさしい木陰。あまい果物。こうした平凡なイメージを思い浮かべては、いつか行ってみたいと夢見る毎日。ウクレレも不思議ですよね。まるで湿ったそよ風に糸をかけたような、あるいは波しぶきをぼろぼろとこぼしているような、くぐもった、角のない音。耳にするたび、うっとりとした体の芯がほぐれてゆきます。

ハワイを夢想する時よくお世話になるのが、戦前のハワ

今回が最後となる小津様のエッセイ。得も言われぬ空感をもっと読んでみたいという方に朗報です。小津様の漢詩の翻訳&エッセイ40本を収録した「カモメの日の読書」(東京四季出版・6月20日発売)をご希望の方3名に当社よりプレゼント!

次回からの執筆者は、小津様いわく「俳句・短歌・川柳なんでも来いの次世代のホープ」という新潟出身の方です。楽しみです!



イ日系人の俳句。なかでも好きなのが自由律俳句結社『層雲』の荻原井泉水に師事した古屋翠溪の作品です。

ひるねの、わたしも眠れてガデュアのかほり 古屋翠溪

ガデュアは世界最強の竹。深い寝息が聞こえるような、余白たつぷりの時間の香りが読者をくつろがせます。

熱もとれたので昼時のペパーの木に風ある 古屋翠溪

庭木にも街路樹にもなり、木漏れ日が美しい胡椒の木。そんな木が風にそよぐ時、病み上がりの体は、気を養うにふさわしい和らぎに包まれるように思われます。

もうひとつ、今の季節にこんな句はどうでしょうか。

外の垣にも花の我家でご飯いたゞく 古屋翠溪

花にうずもれた日々の平穏。食器のあたる音。鳥のさえずり。人のおしゃべり。ああ、いつか自分にもこんな幸福な句が書けたら。

と、いったふうには知らない南の島を想いつつ、アパートのベランダで飲むレモネードは、樹液のようにほんのり甘い。もうすぐニースは夏まっさかりです。

2018.6-7. vol.98 (2018年6月10日発行/隔月発行)

●発行・印刷/株式会社ミュージズ・コーポレーション

〒950-0801 新潟市東区津島屋7-29
TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550

0120-819-395 Facebookもチェック

e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com

郵便局口座番号00530-4-81370 口座名 株式会社 ミュージズ・コーポレーション

編集後記

遅まきながら、俳句を始めて4年強。といっても、毎月締め切り間際になって何も作っていないと天を仰ぐことが辛くなり、友だちと一日一句を送り合うことを続け1年4ヶ月。熟考も推敲も添削もなし。出来は問わずマイカー通勤の25分の車内でとにかく一句! かさついた毎日が少し潤う気がするのは気のせいかな。P3の京都の句会で聞いた「70年以上生きてきて初めて見たこの光景を俳句に残しておきたかった」の言葉に共鳴した。一瞬の連続の人生。何かをとどめておきたいという気持ち。流れゆくものではなく、とどめ、繋いでいく言葉たち。改めてこの仕事の意義を感じている。(木戸敦子)